源氏物語大意下巻　餘論

或曰源氏物語は昔より今にいたるまでの。
こゝろをもつてもてあそびまし誠に若
こゝろ英はくしらるゝ事勿論乃玉突にて。落ちの
左國史漢ふも誠に記書にやるもの。さいは
あまで初学はこゝろかゝ物しなほにこゝを
はつべ。綱ひあつては作者のおこゝろもを
なん。物のけ城そじめ天物樹神変化乃類

皆業乃さ〻驗者共さ〻れまるもし。又い
佛乃大小乗みちを〻悟道發明のちゑ
まぐし。光るゆいさもあも入し人なれば。あ〻
ゑ〻ゆ〻と〻いるゆ。ゆ〻ゆ〻るみ。ぐゑを
も付をば。罪是みちをぐ大をを〻ゑ居て
いるぐし。賢者考へ用捨しまを〻もり

圓通峯下老隱
雄堂祖紘行年八十三歳謹書

○源氏物語を注釋する人。湖月抄の後地下ゆも
彼を〻と〻て。河ゑぐい大ゑを〻ゑ行ゑれ。
ゆいゆ〻を〻ぐゑぐ。物語の作
者紫式部ハ佛教を深くちゑる人なをば。佛
意ふゑ〻〻て。ゆ〻女みまゑゑを知ゑ〻ゑ。この
らんを〻ゆ〻ゑもり

○誰人の説も詞ぐを毎ぐるば。ゆいをのべゑ
通ぐぐ〻といゑ。ゆをなを招るれど。神をゆい

あるべき事なれば。いづれ毒ぜんなり
仏教い廣大なれば。微細なるものなり
○源氏物語の要旨なれば大意をいへば。新勅撰物語
もいへるごとく。以機奪機以毒制毒の義なり。流ふ
いとふ波を訪ふ波を折の手段なるべし。
沙彼も掲諦の教意なり。賢聖の教乃格式なり
等しく諸道もにあるべし。此物語も
なべしなり

○天台智者大師の説法界次第といへり。その
中に同事摂といへり。源氏物語の作者に
かなへる所なり。また源氏物語の作者に
人の竹山集字乃書に登石山寺といへる文章
にあり。源氏物語をば
武部い具部院御乃許可を得て。一心三観乃
旨を深く悟りたる人也。天台宗にもそなへ人なり。
石山の観音乃化身なりとも。なるべしと

ふをはらぶべし。飯茶といふは石ずゑをつ
くるなり。瑞和を孔とするものなるべし。
琴乃飯音は當時式部と婦女子を孔じて色
情を溺るゝ所生涯深度しめとゝのべし。結
人々は飯茶の義書等に考へ見
○趣て喜羅ぐさは前世の因縁といふものにて。
さもあらじと所とゝ所生を深度しめ
ゝ色し。飯茶は三十二意身ぐ色なり。先

年寄系より拝受せし佛書抜かしの所に
ある実話人の飯茶ゝとあやまりいれて。
ある法師曰飯茶とは行ずるものと知る
とゆゑなるよ。所詮は美のものゝ琴乃飯
世音は耳を持つ人ぶんは内よりいたるを
粗茶は乳なり。禅禄を耳聞不似心聞好
云ゝ考へ見し
○季吟法師の湖月抄乃後よ。古学をいふ系人々

源氏を釋(シヤク)するなり。佛書にもまれる人なりしかば
ものなり。日本紀等に葉室氏古書ふかく所なり
矣。傳教(デンゲウ)弘法(コウボフ)の兩大師より佛法本朝にひろまる
孫なりしかば弘法(ケンゼン)なり。世間法の氏は別にもちなり
なり。天子一條院中宮上東門院はうまれて佛ふ
御歸依(キエ)なり。さるほどに隨侍(ズイジ)乃紫女。佛とをしふ
ふるに世間法をもてなぐさめ。時代をもつて
○契沖阿闍梨(ケイチウアザリ)は古学の祖(ソ)とする人なれど。古今

筥乃抄にも佛法をいとなみ給ふ。代直紀(ダイチキ)の
中にも契沖云。人丸は大悟(ダイゴ)の聖者(シヤウジヤ)なりとなり。
歌は無常を觀じたること多しとなり
○細流日世界はあるものなり。畢
竟は本にもどるなり。
大意紀にふるものなり。道遠院殿帝
本巻をよみあるに奇ふ。誰ものまきをも
出るや世は中はなどは帝本乃ひらやもりやを。又

義浮橋、壹の宮ハ、[illegible]誰も[illegible]同じ
世をいかに驚かむ義経[illegible]。山清水ども[illegible]
世物語乃作者を西行[illegible]と思ふ。但
○此物語ハ権実式菓子[illegible]義経[illegible]。これ
までの物語ハ雲泥差異なり。[illegible]ハ
いかにも儒釋道の深きもこれ下ん[illegible]
こゝろてかゝれりのなり。況づひみ褒貶ハ
あらハ。春秋乃筆誅ハ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]

こゝ[illegible]。自然[illegible]
○物語の出始ハ。いづれ清涼時代を性[illegible]
いかゝ[illegible]人間界の趣[illegible]。時
代をつゝ[illegible]。荘子[illegible]北冥有魚
北海ハ[illegible]
冥もかゝ[illegible]と出和[illegible]
和を。明らか悟るゞ人界の肝要の義[illegible]。経義
寶論ハ言[illegible]大師曰。生ゝ生始[illegible]
死ゝ死乃終ハ[illegible]

○莊子(サウシ)などは佛書いとゞ深らぬれども。ちとゞの賢者(ケンシヤ)も胡蝶(コテウ)の夢なりとゞめ。佛の深きに適(カナ)ふるを知すゝれども。山路も莊子は地下だゝるゝ

持ゝ出ゝ給ふこと。哀かゝるにあんめ

○論語(ロンゴ)や子路(シロ)などに。

孔子曰未知生焉能知死(ダラヲズレ)

宣(ノタヘ)ハ。儒ゆゑこの世形もいとれど。山は佛書

いまゞ深ゝゞれば。宣(サダ)ふるは美人ゝ方ゝなぬなる

へゝ。ゝも孔子の知ゝ方ゝぶゝ方ゝ。世ゝ

ゝ方ゝ齊ゝ世むとゝ。ゝ方ゝ。天台は三大部を

ゝゝ。積善(セキゼン)の餘慶(ヨケイ)などいふゝもゝゝ。

ゝゝに一部具(グ)したる書は最初の同下作者

力をゝゝ出ゝゝ。伊勢の源氏物語を。

ゝゝとゝ。ゝて出和ぶ肝要(カンエウ)なゝ

ゝゝん。山は知人は志ゝ。先ゝ方ゝは伊勢

源氏乃二書なり。孔子は怪力乱神(クハイリヨクラン シン)をかたらぬ

ざるハ。男子流のみを礼をぶ為うゝむ。或儒者
曰。力はなきハ為乃字成うゝ湯るものゝ。
世俗ハ古りと学問。子不語怪爲亂神ヲとゝむゞ
しゝ。神ハ人なり云ゝ
○三世乃道理よゝ知人ゝハ。魂の流精を知ふ
ものゝハ。いらゞ思ふゝ。ふるゝ物がゝ。
ふゝいゝゞ。須磨の巻ハ桐壺帝乃事ハ。源
氏に為ゝ。まゝ義壺女御の事ハ。

源氏を恨ゝ。六條御息所生霊
死霊なゞ。皆葵式部の方便説と思ふ。
文粋ハ融公の亡霊交に付ていゝることあり。又
無門関の倩女離魂なども考へ知べし
○世物語ハ善悪邪正さゝ。皆ゝ百話より
あるゝ。ものゝ。むゝ面白ゝ。
つゝゝ。浚車乃滅ゝ。
なれゞ女子もゝみやゝ。滅ハ未曾有乃物語

ちり。そもそも哥詞もとゞ後成宮家の紙ぞ先皆
作り賞美しもてり。又此物語共古より出る物語乃
ちなれども。勝れたるを作りて
○或ものゝ云ふ此日。物語といふもの多くあり
形ごとに類ちる故。儒佛の書より引うつしたる
ものゝ多くは。かつて大なる新ひがごと
なり。保元物語平治物語平家物語などいふ
実録ふる物語ちり。物語といふ故廣く

いふべし。論語は孔子の物語ちり佛經は釋迦乃物語
なるべし。諸子百家稗説といふ皆物
語ふるべしといふ故。ものゝ成れる完く
ずして此ものの語をもとゝ女子の作る故見
るべし。新古今慈鎮和尚形ごとに業平を
ちして物語ちる作のおもみ此山ぶし
此哥のこゝろ此物語ふるべしと考へる
べし

○当は夢に悟りあらざるのハ疑かしくて疑ひをさし
はなしおりんぞこいさらず悟りの端をさとし。
過現未は三世の理ハ天下の実理なり。譬へバ今
日の現在なれバ昨日は過去なり。明日ハ未来あ
り。年の現在あれバ去年の過去なり。明年は
未来なり。事物皆此理あることぞかし。明
日の事ハ知れね。来年の事ハ知れねといひて。
三世の理知らずしハ誠の目無しなり。昔身が

なくバ知らぬ身なりとあらて明日なることを知らず。
明年あることも知る者は。来世あるを悟らずしハ。
死ぬれバ燈を吹消しとる様に思ひなすなむ。譬バ
ともし暗室に居る物共也に行くも。されど○ども
夜明くるれバ善悪の所業ありて見えんこいへハ人の
身にて一大事なりと挟しよく深く思ひてよく
○前段もいひし如く。おしハ悟りの眼がなくてハ此
物語も物の哀れを知らん疑ひされてと見るらん我

も悟りとはあらぬ。されど。幸ひ佛学み
ん。林野も閑居し。爰かしこにも山居
し。又ハ諸宗ようを尋ねて。いとう時代の明らかなる
ことなきせれど。学問東西。賢愚を糺さん
先悟の悟りハ法性をよく知るべし

悟

○悟り其根元ハ拈花微笑。三世不可得。幸素無
一物。柳緑花紅。千白万白。其葛藤も安く通ずべし。
和尚与人問答に義てれ。書物を考へ思量分別
して悟まるべ悟りハ。却て害ありと知るべし。
和歌をも悟り法学をも中に。續後拾遺に入
根来の開山の寄に義中ハ義も現も義なれば
ちんさるべ義を現しとも。初めてハ浮世の
あの法学ぬ中ハ。ちんさるべ浮世の大義
ぶさんさるべ。義も現されるのんさるべ。法花も

此経を明めんと思ふべし。世間の業を捨ぜよとは
宣へり。悟りは志わかて座禅をもすべし。学文も
すべし。左右も出家を利根も法器を。不図
浮世の業が業なると。垂示仏祖の師なり
○一如師曰。但見其迹莫測其本云々一如は法華の新
注をせられしの高徳なり。山居にまつる武家
業の中なるは。迹といふ弱れる和なり。本
いつもきんもり。和奇特なりといへば。一首を云

弱きは和が迹なり。本といつもきんみ出を
時のんなり。本欲乃迹のことを仰をむとする
和んせんなれば。家々の業に古歌を系
氣を観音せもといひもぐるぐるとも
はあるべし。観は観法形の観乃意。念を形意
あるの意にて浮くんは思ふ。荘子に斉物
公業にして和書はをれを。輪扁が聖人の
糟魄とそしるべしとも

○一切経は唐の代にまづ四十八巻といふ。物語の
五十四の数はさきにもいでたれども。舊説のご
とく天台は六十巻とうけたり。さらばいづれ
をもとるべきか

○深草は元政は幼年より源氏物語を好
まれき。別に蛍巻あづかり蛍式部と黄昏を
ならべて文章世山集に乗せたり。これ和集
中に源氏の事有ふ出せり。和歌者流はさ
のみ思ひまどはれど。和歌も一芸にあらで。草山
和歌集とかの一書をひらけば。板下は自筆にもあり
けるとぞ

○儒家七論とて小冊をのこす。男女の徳はとりく
ずれしたり。又面白物語ばかりを釋したるもの
近年出たり。源氏は乃あれど。詞のつづかい
大抵なる歌ぞ。又源語抄とて小本もあり。
行基も仏法にはあらず。達磨大師東土にて

天竺にて阿闍世門人城集めて人を試(ケン)
識をいたせり。汝(ナンヂ)が皮(カハ)をはぎ、汝が我肉(ニク)を
得たり。汝が骨(ホネ)はくだき、汝が我髄(ズイ)をはぎ、
はたらき山龍を得て人に二祖恵可(エカ)大師あり。須の
うへのこを釋(シヤク)とは。紫女が皮をはぎるやうに
ものあや。龍まで及びても。肉をうばとを得
ものあるものあや

物の怪(モノケ)

物(アヤシ)の物はぐものあれば物怪はけしからぬなどいふけあり怪しきあり

○ものをいはもあり付りのあり病なり。
女はうへあり。凡(オヨソ)女の性は慾(ユウ)あり。浮世の
道理ふかくあり。んはいたるもあり。
おしれるおもとやうやんがいくばくしかん
ばかりあり。中れ邪神(ジヤシン)が感(カン)じ合てるや
まんまあり。鬼(クウチウ)べし。狐狸(コリ)の類(タグヒ)つづき。
抑(ヤ)中に精神(セイシン)邪神とやしらる
氣のいるが。則精(スナハチ)邪神あり。人は(スヽ)ぬ赤乃肉

まても。日記がさ〻人ぐこと氣ふかゆるこのちう。
ものを靈沙門ものも。龍蛇混雜ぐもいつて。
佛おうて香城きく〻ハ精神乃佛を重つる〻
なり。佛ハ佛國土のこもるべいべこおもいつせ
バちう。又惡人を調伏の法り。自ハ惡行を
なく〻ハ。京中ハ神を重つる為こや。人ハ
めよ京うこ〻ば奥ハ法めおあうこ〻ばこと。
驗者の法力おく。付物を志ぐ〻ハちうはし

こと。外ハ事女なぐこに移かるるもいること
しもう。養生を智者をぐおるもこうぐし。
志ハあ行ど。驗者の法力ハ弱ふと。付るの
氣ハ強こと〻。志〻ハ有るあふを行新
べ。世事ハ日記ものも志〻ちう。物のけおの彼
ハこいつぐ。妻く志〻ちん
○夕ハ養こ〻つ〻神ハ所の物乃をハ。京中ハ
神ハ力を強るゆく〻ふ強。京殿ハ養生に

御息所曰。身にしたがへるものの怨なり。人を
あしくもてなすべからず。拾遺に
ものをおもへばさわぐ胸の。はしるべきかたをしらぬ
思ひかな。是なり。
○ど。邪神が力を借る所なり。大集経に
も一念起嗔一切魔鬼得便云々。一切をのれが
皆式経文なんどにかくるものなり
○浮舟の入水せんと思ひたちぬるあはれ。
修練もつとめ法師の。ふと女に恨むる一念の

逆り乱霊となりていざなひ行くなり。あくまで
手習尼に考へ出し。大弥生の僧のうへにもあり
一念迷へば多くの魔ありて。新續古今に佛
國禅師の見解あり。侍りあるを歌よみ
ても山ゆゑなる山桜とて嵐はありもそすれ。
修行力が堅固なれば。邪魔はよりつかず
多くの魔ありて邪。
五家は別にもあり

○為業下に業とのやひも物のをなりられど然
上人ありまび常に佛を信じのべ。佛神の助乃
あるあるよえ和歌。多くい御法は書りてある
べし。大神世を佛を信じ法人多りれど。或を
多ゆに事ましませなどして。其乃信心すれし。
佛を信せば誰も業とれどしられる事
なるべし。抑神佛ハ目にゆることのるるれば。
有ようを申れ精神を佛とも神とも祈り人

べし。山岳を信じうべ大なる事ハあるじ
○廣大なる天地のうるハ不思議なる事多き
ものなり。不思議なるあるべ。我人共此
異れあるものうの眼ぶとぶるれり。
天狗樹魂乃類。又海山大海ハ多て怪しき
事ども多し。大神ものけハ言葉乃婦人ハ
うに多し。言葉人ハ物ハ狐ハ
腹立ともいべ。玉の結ぶむとぶ山を

形り。性理字義に曰大抵妖由人興る云〻

○精神(セイシン)は正直にして汚(オコナ)ひなし正〻。物は慈悲(ジヒ)のんいる人ちゝでいかゝんゝゝなるべ。邪神(ジヤシン)を祓(ホウ)とむさぼる故り。横〻なる事あるもかゝんするなり形り

○物のけ世物語の比なりと思ふ屋なるべ。若もとをいるるもりけといづれ理もよくかるひ。家もしたぶ四やり形る男人。妻女乃ふて

かゝるみいるなり。行ふまれ病名のけを

うる死形(ワヅラ)ひは皆物のけなるべし。ゝゝ物り

執(シフ)ギヤウ名ともバ。右よいる除れ障(サハ)りあり。愛(アイ)

ゑにおやの死霊(シリヤウ)ともいるるなるこのし。

故よ大系教ふ佛り執名を死をもいる

しんなり

○疑思ふ先書又は義紫の文乃母御息所

形ど死物の事は。行りのもも去るべ。大狂狂気(キヤウキ)

痼疾(カンシヤウ)にもなりぬ。

又こゝろうつくしき

○蔵式部(ジユシヤ)は儒者の娘にて。幼(ヨウセウ)の時史記など父の

為時がよみ給ふを。こゝろ入て日記にもかゝる。史記白

氏文集などいとゝ諳(ソラン)ぜられにけり。五十

四帖の内夜々こゝに来給ふ。桐壺・帚木(タウ)・空蟬(ゲン)・夕顔(ソウテイ)

唐の玄宗帝(ヒ)の比(ヒ)。更衣を楊貴妃(ヤウキヒ)にうずゝ

へ。朱雀院を澪標(カン)の恵帝(ケイテイ)ふ比。葵壺を戒夫(セキフ)

人(ヒト)にたとへ。弘徽殿(コキデン)を呂太后(リヨタイコウ)ふ比。もゝ[illegible]

桂(カツラ)にたとへ。日本紀事をいとゝもちゆる。此の

女房達は男子にも優(マサ)るとし。皇統の前後を。

女方の心(サカン)賢(コロ)ある比いうじとつゝ

○面影の物語なる馬頭の咄(ハナシ)を。佛法法華にもづゝ

き[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]又[illegible]。湖月抄の説(カレラ)も

出たり。又上下ぶ上下。中比ふるゝ[illegible]。歌

経乃九品蓮華比。ふ上生下品下生比経文と

うけたまと

○法譬因の三周ありて。女児らへ我かづいふハ法説なり。絵のある文ハ細工の事なるごとくハ譬喩説なり。むかしばなしなどもきゝ悦ハ因縁説也。吉祥天女の事をいひ京菓子ハ呵ゝ大笑しなく佛書にあるよふなり。多見て綱よりみるがごとく。此時光源氏ハ十六なり。頭中将ハ葵上の兄なれど廿二三なるべし。馬頭ハ三十ばかりなるべし。此文にも七年餘りの程ありてあらんなれどいふも。頭中将七年経されど三十ばかりになりなくてなるも。大辨三十ハ心の定まる時なる之。佛も三十にある成道しまして。孔子も三十にして立と宣へり。持男女の道ハ人倫の肝要なるにて。家議おこれも亡ぶも皆是からなれバ。ゆるがせに馬頭の鼻をはするべからず皆むかしどもなり。しかれども源氏を頭中将も後にハ帝の補

佐もしまの公達うれぶさうのしの女れうへといひて。
誠乃道を馬琴がゑんなり。佛の応生芸機ゑ
意じて法を説給ふ。なかつも落ち話るものなり
○或云ふ曰源氏物語いにしへ朝の玉宴なり。唐土
左國史漢なども誠こゝに書るり。彩こは高名ふ
意こゝ言ふ。人の國にも紙こゝに覚西と絵
らまこゝい。佛之ゑ書むれ形こゝし。彩の玉宴
などいこゝい。孔子の教情孟津抄もいひ物

○世物語を色情乃媒なるこゝ。一産の擬淫とも
なべ。一書をもゑんぶ物語乃いこゝなまこゝ論
ぎこゝ乃ぶべ。人誠れぶ決大芸ゑげゑんふ
おもこゝ
○夕貝乃遥曲ゑや。世もし光源氏芸物語こ。
云紫幽艶こゝ理淫こゝ似こゝれども。人善
悦人式すゑこゝ義こゝふ法こゝ。ゑほぶの
物こゝいあこゝ彩ぶ。人をつもこゝ考こゝ屋こゝ。この世

つるみなり

○又江口のあそび。実相無漏の大海よ。五塵六欲の風
はゝ〳〵○ども。随縁真如の波たちぬる日もなく
さ〳〵。是は源氏ふるかさねてさ〳〵。菩薩の
応生涅槃の教なれども。さ〳〵此物語作者の
うるべき記を。書女は慈悲心の大海より。法縁の
波はさ〳〵。はゝ〳〵男女の交情の濫觴を。
人〳〵はかなき田地に等しく同じ教なるべきなり。

謝よ此譬喩は作者が仰ものさ〳〵出来〳〵
なるべき。始より終までつゝしゝ考へるべし。此
一曲にも仏法の大意は見へ
○光源氏の好色も。六條御息所の執念乃涙をも。
繁昌は幸城にあり。多くの人のこゝろをもとゝのへ
づゝとなれしも。善知識を持て生れ
らるゝも。又は世の人乃好色者のすゝめを。
はゝ乃疎略も。皆さ〳〵世因縁なるべきなり。

されば佛神はそむ（ソムト）かれじ身にうるしをぬる相應也
とぞ申ハべるべし。是のごとく末世乃正因（シヤウイン）なり
○若菜より明石入道入（ニ）こもる。姫の御ゆくへ
の遺書（ユイシヨ）に曰く、命終（ミヤウシユウ）なん日もちかく成しと。
いかゞ人世深き所なる事哀ふかし。
つまり。されば我身ハ変化（ヘンゲ）ものと覚（オボ）へ。
老法師が為ハ切徳（クドク）をほどこす。世の乗（ノリ）を
ゝも後の世地獄（ジゴク）をまぬかるゝと。変化（ヘンゲ）

いかゞ布袋（ホテイ）和尚ハ弥勒（ミロク）乃変化。寒山拾得（カンザンジツトク）ハ文
殊普賢（ジユフゲン）の変化なり。世俗（セウ）にも伝（ツタ）へ。
ふ妻（ツマ）いかゞ。変（ヘン）ハ若さ子の年ゝ変ず。
化ハ生（シヤウ）ゝ死ゝ姿（スガタ）を変じ。
猫（ビヨウ）ハ自然（シネン）墓（ボウ）がうるぎ。猫（ビヨウ）虫が蚊（カ）と
成（ナル）。水にのるゝ。みゝ虫がんぼ成る類（ルイ）なり。
天地のふるゝ。人世ゝ一切変化
せずといかゞ。されハ。
ゝ花のあも春ハ花を咲（サカレ）

小さき本の芽も秋の末まで大にさかり。冬に成て
こだちが大ぶるを又めをぬきぶるに人も皆変化
しるべきゆゑなり。もしかの流物をしばもく。
荘子にも変化の多くいふに一段あるべし。徒然草に七十段あるを変化の理つゝを
知らずしていふべき考へ也

○蓑笠御息所紅葉の折ふしの歌
彩りかはらぬ田子の浦波こゝぞ見し源氏物語

第一の奇こゝにかゝりぬ。ふもんの源くゝみ
さまれ安なり。此歌の作をいとゞ遺教經
如老象溺泥不能自出もゝ舌なり

桐壺

○こゝにはじめこゝろは桐壺。つぎは屋敷器もゝべし。
此度こゝにし更衣に居こゝ彩屋の屋。桐乃
末にあるゝ所に桐壺に更衣といふなりつぼを屋
ぞみ。はじめは栽。花のはぐゝを形どりつぎに書く。

出家は大庭野ぬ小庭少人の名なるべし。梅
壷梨はなべ義つぼ皆同じ。尚侍の天子を相
壷は帝といふ。山桐壷に居給ふ更衣を。
これは寵愛深くて。おくゝ出御あるなり。桐壷
乃帝ゝ中なるもの。更ゝつぼといふ。尚侍
廣ゝぬ所をいふ。和名抄。壷は宮とかくも
壷は廣ゝぬものをいふ。山吉は吉ゝ
行ものは時ゝ形がゝして。終も人作ゝ

時ゝ招ゝ出なるべし。山田語城人名ゝ人の
ゝ跡を付ゝ世ゝ。五十巻帳も大
方は世俗に出ゝ新しの物ゝ。ゝ付ゝ書
物ゝ花をおほ。ゝ花あるべし。禄宗は
仏法祖師なるべいる。又一切経を用ゝ
ゝ指ゝ。ゝ道理
なり。仏教のゝ思ゝ。ゝ史五経ゝ
ゝ。ゝ書籍は皆実地ゝ

ものなり。いく書にあたれば。儒釋道にも
に害なり。新古今あり。ちぐさとてもいく
いくなれもとばあるれてを出かとけと。
此歌海人ものとて。一切のものふれる法
名歌なり

帚木

○面白物語なるはおに無し。ほとの乃ハ明恵
上人なるかの育ぐさとの一云に至せる。

半紙も紙なれも男女老お犬猫までも。ちぐさ
ものなるは一云ふ所なり。ほとに金云ちぐ
し。諸賢の書るも考へるべし

○面白物語なるはおり。ハあやまれるもの
なるは。拾集にしみ人ものに
世の中をかくいひしてこそハ心なやいと
ふくんなすくん。心も何を世古歌の云なり。此
人界此事をいひ完むとこいやしれるものも

ものなり。流れ[フレイ]ぐさまれ仏尾にも仏[ニ]てゝ[illegible]
[illegible]し。儒釋道の法[ホウ]も自身[シン]後明せり。
古[illegible]古歌のやうれたる形[illegible]。[illegible]人[illegible]後明
[illegible]法悟[illegible]いふ[illegible]ぶ[illegible]ていふ[illegible]。佛[illegible]家といふ
[illegible]式達磨[ダルマ]大師の佛[illegible]れ[illegible]ハ武[illegible]の[illegible]
[illegible]

夕顔

○世巻[illegible]御息[illegible]六条[illegible]。行[illegible]院へ
霊[レイ]が来て。一[illegible]が二人[illegible]夕[illegible]を[illegible]殺す。

此類い禅林類聚[ゼンリンルイジュ]無門関の清女離[セイゴ]説[コン]ちがひ
[illegible]

須磨

○世[illegible]源氏[illegible]八百[illegible]神も哀と思[illegible]
[illegible]花のそれとちがれば。[illegible]。縁[ニヲカ]風
西[illegible]天変[illegible]ハ。天怒[イカ][illegible]山変[illegible]。
光[illegible]奇のハ。我身[illegible]流罪[ルザイ]といふ程の死ハ
なかりに。[illegible]義[illegible]式八百[illegible]神を哀[アハレ]と

ゆゑなんとの歌あり。源氏は表白の花い朧月
夜あり。ちまたの女は后女御といふまでも彩く。
大内の女役人はすべてこの人形なるべきなど。
大きなる花ぐはあり。義壷ふ容道はなはだ
弱まる。ども。神ふ去ぬ。ん。ん。ん。ん。ん。恨て山
寒はなべて。ものしてい帰洛の瑞
相もなくれど。先い天の恵なるんさ彩く
い神をいざむく拝乃ものもばかり

又ものよはかふ入ないやくとり生まれて仏よ
んをとせ。まこと往古の明神を源氏なり。大乳と
さもこ人なれど。仏神神乃冥(アン)て琴(ミナビ)ものして。源氏
を須磨(ス)へ引せはかりにつし。娘ま源氏はまを
うませ。そ事ものはなべさせはかれ。若菜より源
氏君入ものの状をんなるべいなれ
めをみまぐましもの。人ものはかれ落ふをはか
まもいかれ彩をんなんとゆのし

れば人の肉よりおごみる狀(ジヤウ)をうましつるを
しけうるうちまつ。神佛乃極楽を深(フカ)く悟る人
なるでいあるるん。がれるどもあるべ。人
ぬむ所(コノ)ゆ作り屋しー

繪合

○山里にすんざいといるまつ。政道は事とい
つ。莊子列禦寇(レツギヨコウ)より本才といふ文字はつ。色い
人に扶くなまるを治暖自知(レイダンジチ)

を知るるるる。考へ屋しー

梅枝

○あるでうる絵を思ひしよかをと云くはつでと
うる絵は別ちるべしあるでといつを草の紫はあ
後左右へ風をなびく搖よ。歌みても文みるも
ちるるかあるとと義(ナラ)おしがるに出るて形るべし
山事は雅が從(セウ)りや古学若乃つるるとと学る。中
峯和尚法華乃禁ぐれといが能るべ。うる後は

ことと絵をさまざまにかきあり。されば世にも伝へん
ある事なり
○手習浮橋などに。天狗(テング)樹神(コダマ)鬼(ヲニ)などいふことども
あり。日本にて天狗といふは魔(マ)の一類なり。唐にて
はそれにあらず。木玉は人げなき所の木に宿(ヤド)れる
神なり。我ひとりいますところは。法性浦の大庭に
平なる大石あり。しばし二時ばかり座禅(ザゼン)して
ゐるに。傍(カタハラ)の大なる枯木より銀の扇をさしかけ

きたる猿の手みたり。家路せんとて我もてこころげ
つるの精の様りゆく。ありやと思ひ手を杖(ツエ)
にかけてまはれば何も出で。ふみ道生きたり
こころなど尋ねかへし荒(アラ)はしといふ
見ゆべし。其れ七ッ時のころなり。何によらずは
怪(アヤ)しき姿(スガタ)をも見しときのなすべし。又年始の
大木はさりて祟(タタリ)するものあるなるべし
鬼(ヲニ)は和名抄鬼魅(キミ)部に。鬼(ヲニ)は隠(ヲン)の字音なりといふ。

蘭(ラン)をらんといひ。丹波をたるまばらといひ。鬼(キ)
神(シン)とつぐなひ。日まはりを葵(オウ)といふ。神なり
とやつるべし。今序文を目にみえぬ鬼神をも
はらへと思はせたり。佛教よりいふる鬼も是なり。況
して和歌。形なきものを思べきことにて。鬼など
いふこと。山路などをあるし。隠れ蓑(カク)を着して式
をもばんとすれども。生ずる所の病なり。是
をも心生(ス)闇鬼(ノ)といふなり

○或曰。歌は文を中に佛經ふまもバ行ひ益(エキ)
なしといふやいかゝ。佛經は大乗菩薩(キヨダン)なれども
をやうに。虚説と思ふべし。虚説にして中はん。凡
二千七八百年以前。天竺にいひつる菩薩が。
中興より。もろこしに國ゆきて。今に盛(サカン)なる
いとうるれば。先世をつゝし考へ。
大法東漸(トウゼン)と佛法中興。此佛法を漸東(ゼンとう)
國に廣まるといふ。此佛法世に益て

中ゆゑ事どもなり。又歌詩ふみ文まとをりに。佛
經等あまたの人乃和歌文章ハ行ゆく水の流のよ
情(セイ)がけるるもなり。玉石(フク)をあらそ石のごとく。麁(ミガ)けば
つゆし光乃生るもの形りなく。世物語もごとも佛
ゑよりなく業女(ス)ゑ出まるもの有。報女(ン)ゑれば續
度毎(ゴト)ゑ少しづつ。今まで氣の付ざる事ゑ付ん
ゆるるの世ゑし。有ゑ多くゑ物語のゑり生ゑる。
今に人ゑゑ賞美(ショウビ)するハ古の道理の行まバなり

ゑ知るべし。警(トク)バ德ある人と物がたりするハ行と
ゆく感(カン)もゆり毎(キヤウ)もゑつゑ行ゆくゑ。ゑゑ嚴經(ケゴンキヤウ)
ゑハ釋迦文佛を。雅(ガ)思淵(シエン)才(サイ)文中王(モンチウワウ)ともいひ。
ゑ聖賢乃洞ハゆゑ行ゑゑゑ賞(ツラス)く
ゑの行ゑゑし
○世ゑ歌仙の自(ジ)ゑ佛ゑ讃(フク)める歌一二ゑ
人丸(万葉)ゑの母ゑ八十ゑ川の綱代木ゑ行ゑゑ浪の行ゑゑ
多くゑ人ゑ乞ゑて切ゑ果ゑ歎(カンガイ)ゑ慨ゑ

古今
貴之新撰のもとをれ当かりをにうれをれ申と思ひめ給
人の身ハ一大事ハあることと仮初(カリソメ)ハ思ひ
と。今初めて氣の付る歌ハ一大事ハ法花乃文
新長今
西行風
新勅撰
宝治
右二首ハ別て名を欲る。仏を成思ふ人ハ
ちの名をも思ふべし。あり難いつて
もなし。宝治ハ天台の止観(シクハン)を深く人ぶる。法

名を明静とハ。止観明静乃文字より付ぬ
ゆゑ也

○或言ふ貴賤賢愚教へ多く儒釋道の書を。
後世を深く思ふ人ハ了簡(リヤウケン)少しづつかゝる。
その解釈(ヨイフ)が多くかゝる。和歌ハ仮名也
乃物なれどもて形ちを成業平宝治ハ
なれば解釈が多し。ちまび古歌古語多い難得(バユウドク)
して人ハ物なれをのやゝ。或時後水尾院の

御前にて、そこなる歌仙達、彼是と歌共評議
あるに、傍なる新古今式冊をみて、宮内
の歌は旅人の独吟なるを、私風に夕日さしぬる
山のもみぢ葉、此句を味ひもうれ侘まと。
行くも帰る程招がなるとは、あれば、皆々志
うつとは同じ心なり。ちぐはぐもうれ侘を中
なるれば中なる中、皆志ぐ〳〵一人中
されしい方紫の色やあれ独吟なるを花風

物を遠くいるるを吹。又一人は古今式冊せるう
衣の袖を吹うつ〳〵うるはしく秋の和風。又一人
は戦国乃時魯陽公が戈を持て夕日式冊をおれ
しかるとも吾むうつ〳〵とかへす。大和歌を
もつふ三十一字ばかりをば、ぱっとうつくしくよみる
うへは、俗をおもあるを招よみみれのつ中
なり世事為を閑書といふものにもあり
○和泉式部と反古ども式冊を取り中に。

宗紙の沢山なるこゝろ。古今序を釋せるの
ごとく。むらくゝ路くゝなれるの花。爰に志
賀者考山色し。春山あくれば花ちるをこん
秋の夕暮れば木葉の落るをもて知るべし。い
花花落葉を歎ずる緣覺のこゝろ。毎日後の
新ふるを見れば波と寄る紙歌をは無常迅速のこと。
浮世雲の泡は夢幻泡影如露亦如電なるごとき
こゝろをもて業ずくりて人間をうゝうゝしい盛

者必衰なり。此下歌にのゝ世をあくさんをあ
とゝはるゝまでは。諸行無常是生滅法有爲轉變
なるのこゝろ。まゝはあれど山序は續けるよりかん
ちもゝこの世が國の詞をかゝげ。此國の和歌
にゝりて出るゝりゝ形ゝれ作るゝて

○此物語に多くゝ出る詞の。出所明らかゝに解
しがたき詞ども。思ひあるまゝにあらずゝ。
能ゝ見は我了簡のゝゝはあゝべ。さんをあや

多かることも。文書物にみえることも多し。実(ゲニ)も
然思ふ事はとりどりにおもふは猶考へきこえなり
契沖ノ説ハケしとされしあれ
あいなく見成そゞろめ　あいなくハ無愛なり。愛なきといふ義にもあるべきことなりが愛ある也。老人ハ
老人らしく。小児ハ小児らしきが愛あるなり。譬バ雪月花ハ愛すべき
ものなれど。時ならぬハ愛なきがごとし。目とそゞろめハ正面より向はぬ眼を
いふ。せうとも見るを目にみゆる
様の詞なり。長恨哥乃詞也
いとさしもあらずて多かれど　さしもハ十あるもの一ツ二ツ
たしかなることの無く。物の保ちなく
とぞいふ詞なり。なきハ蓋も風とあらけなきといふ数なくて保つる詞
なり。是ハ形に。常語にふるまひいとさしもなくしていふも。さしもよから
る男女乃所為ハ不似合にて。そゞろなぬ也なり。帚木に此子乃頼み人
らんてもつてそしる事とぞいふ。頭中将のみな家の雪うける男が
こゝろもバ。源氏君のけそうしあるく文などみゆるも。何る事ども知る
まで折さるぬ事なきバそこし形ぶとみゆる所なり。称しめやの詞
ども。文章の勢ひによりて移る
ことのあたれども。ハ一ツ詞なれ共
よしなかりし　よしなかりし。旅(シユ)を約(ツヾ)むもとする
あたりなり。是ハ上臈めかしなり
おほすげ　大人(オトナ)にかへるをいふべし。おほぶ
ゝるもいふべし。猶考ふべし
きなどあり　きなどのるうれしするもとけあるやうなり
おもふべし。又ハきなくなる也としけハ通(ツウ)の意之
ゆかしなし　勇く雄く。なげの言より出る事。常にたも称ふれ共。それ
身もいとゆゆしもおもふてかたるべし。和語ハいろはの
四十七字より出ざれバ此類多し。文章の意を遂なく解をとるべし。
しかれハ類(タグヒ)の言を含む詞なり。キとクと相通なり。業平ののいくしくる

り方の歌も考へ合はせるべし。ものしれる者あり。
しれものしらぬ者同じ。さきさは須を張れるをあり

ちらしがき　さびしれ美あり。ケさびしいとつてつをば寂さうし
しといふ和歌乃るるしれ数多し。世釋八廣くてもし

すがし　迷まるを。俗にいふ春ごとにも
ぞうのを。神代を清くこと

枕おとをもをこせの人　のをれ。好考人尽し

らくもけ　是はるるこれを多くつくり。藤高をとて須と紙をるれ。
女乃雲気もらくて行事も女らしく個にて功をつむこと

好をば。猶をれをらくけとつるるん。信教私言の連歌付合の五体も
いつぐらく浅をるるる白も。おなれをれをみるる。らくをれてこれる
をのなりをる。藤八極猶戒猶もの猶社を立て。
号の西も巧べし同じるもの。男子にも稀ふをいる

きをいしれるざ　ありとちぐらを歌をるる　退くれ。人乃而

他をとなるこいぐもるると我人ふも退けるれ拙乃西り多くつくり
変いをれ帝乃御身をて。好をを一人の女をさ行ふ思れはあぢれ
好をるを。人をれんりを帯れはもれ状退けるくをよる。ぐし
しれといふれをかをにある何をる。大狩は退の字れんなり

ふんど　念の音ふくんるキバル指の西ふ多くけくり。念仏と
ふもつくれるすをるも行んどを云る。枕を巻に清お納をいる
を山けく布ふ。苦をを行んどを考る又行をれを行んどを
もをかふ
ふどけり

わさし　ケ大方といふ例をうとを云る。又ある注を舟長
ふどの長をてをを何といふり。考へ尽し

をのぶ　をのれらぐし行をを多くけくり。仏ふを自恣日
といふを。をのをし放参して行式自恣の例をぶ
いふり。貫之集をを。これのんやをを
菊れれをるるをのぶ行なる

けちえん（ゲチエン）あぐべし

あはしまれ　泡淡ちぐさの字をよりいつる須れ。淡く

しきをもちぐし。同じてまれり

無味氣なり。こを人乃侍る新の字付ちぐさ。我人より

あぢなきし　はちんぜんまもるを。食物乃味ひちるを指乃心

ようしく

ろなり

おしまれまなり　女らしきを女しきとこんまばん新ふく。物を

ちり。新のおきよ物へ

はるる形ぐの新れ

おそそげ　けん人方驚くも面新こを。思新の氣をちぐし。思人

この新の指りしんゆるを形り。思新ご万ゆに毎ごて

廣し。新物指物

書部に書し

うるはして　古注ふ新をしくなり。ぶむる須をり云ふ。うるはしくを

文書ひ書侍乃為り。ぶをちくうはさくといふれ

形考へ

屋し

もげ　安下ゆるぐし。俗よ一向といふ

同じ。佛出ふ底下凡まをどいり

ゆをぐるるやとおぐの　ふをぐるい恢学天ふり出る須。おこい

おしふく笑ひ城金む指の須し。

鼻ひあぐり形ぐのふ。文物をぐるにいひちん。爰のおぐの

もんの肉ひ。ぐけりの笑ひを含むこなり。ぐ須ひをいふ

を土乃國ひふゆり。中毎ゆ伏してものぐ國ひん楽を奏した

るぐ。甚おしかりして澤書の注ふ乃西。ゆ朝文輝村上天皇

御製。鴨（カモ）惜（ヲシ）來朝（キテ）自

爲解頤（ヒトヲヒラカシム）之觀（ミル）云〻

ますぐ宮りあるを　ますぐい者をぐる宮ぬりて

ていふ須れ。女い男を侍りて。男を

女を侮りとするこそのはく。あさましきことなれども
なり。是ハ源氏君よくお書き置きしなり。あくるまでも以て

おいらかに鬼とも向ひ

おいらかハ。おほやう大やうなどの事。是ハ
汝が云ふまで嘆きを减しおくも。爰ハ
物がやうに向ひ居るなり。汝ハ鬼か指をくふものと云ふ
ことを指食女の所へも。おいらかにしもりくべしと云々

うしろめたけれ

後目痛れ。うしろ安からず
なり。何を物を指のことと云々

うるさくて

此詞ハ指くの字をあれども。我々の筋より
遠ひたる時より詞ふて俗よりいふと同じ

うけひきてはなれし

ケ云くもそねることなりと云々。是
法なるべし。我ハ常乃女御とも是

法度どりても
不足なること

たなばたく

無越。天人なり。ケ云に
而て縫ることなきこと

あかさひ 別むつぶことゝ云々

かたはらいたし 片腹痛れ

あいなく 計無なり

そばそばしけれ

そは物語にや。ふるくから山の椎かれしはまとそ
しし床にあしはら八。椎乃木なるは床にあらねば。
あぶらかにあれことなり。ケ云柧棱を文選にそばしとよめり。
木の名なり。方木なり。蕎麦などといふも角ある也。角
ありてあぶらかにあること。
柧棱ハ俗云錦木ならんなり云々

こきびなる頃ハ

むかし何あるあとにて。何より出る詞なや微(キビ)
ハ兵軍書などに勢の微(ビ)なる頃ハ云せなどいふ
微也。禅録に龍頭蛇尾といへり。初めハ強くて後がよわきことなり。又
うら紫の書に閨府乃雲母雁を夕霧が細ハ強くいひて中ろし頃

まだ後にはさまざまありける
布留志りびといふ詞もあり

大人(オホト)なり。これぞおほかたなる
和のうたに多くはべる

あるじどころ
おりどころなる御厨子(ミズシ)

大宅の説なれといふ釋あり。大抵なれ
雑の凡をわくる雑々の所といふことか考へ
べし。○抑てみよといふ詞の數は。儒佛の書籍にみえてあげつくすべからず
いる。大和詞も又は世上一方にいひならはしたることをしるべくなれど。
漢字や古書にいづれもあるなれば。悉曇(シッタン)の摩多(マタ)體文(タイモン)などによりて
釋しられたり。又論和語は西天の陀羅尼に同じなれば。其古風も中々なること也

○前にもいへるごとく。此書の作りようは。一方によ
らず。ともかくもあやしき事どもにありてよろしく
わしきひつがらうして。今日は記のやうきもなきを

まりとて。此和の詞なれど。あまた然れど。佛の多年に
經行の功によりて曉(アカツキ)。早く我が悟りを開きぬ。
臘八(ラウハツ)月雪山より出るといしかど。下より皆の腹(フク)なれ
文章ならんなるべし。一般女子うへを論じたるは
佛書の論部に異(コト)なりし。又浮世は大姦の覚(サメ)さ
るは。般若の經のうちなまたばかり。又人目
面ほどにしたる目の曚(モウ)くとしたるは。人界の招
きを佛の多年修行の功ありてありげどもいひ

はぐし

○藥葉のうんぞうは。病人の惡業は勿論のうへ。あるいはうぶ佛からとていろいろの善くうん。と法華師のうんぞう。病人の情(カタハラ)ふく湯をすむるうへ又七ヶ所の。色が唔(ノエ)のうへにうゑ惡業をうゑんぞう。灸(キウ)乃ゑもうんぞうぬるゑ。けゑまでいとうの人をとり灸もぐいしまいぐるう。年忘物語橋合戦乃ゑまい灸をうゑ

○悟りい人ぐ善年にんを磨(ミガ)ぐ。自(ジ)ん分り教ゑする。うんぞう。河(カワ)弘(アラハ)ぐ道をゑうんぐ。菩人ゑは。ゑうんぐ。あゑよゑ二巻ゑ菩かゑうんぐ。ゑうんぐ。ゑ付ぐうんぐし

暮花軒祖能護誌

源氏物語大意下卷終

畧傳

祖能師者。江州滋賀郡雄琴邨人。姓和田。父貞秋稱莊藏輪王寺宮官内郷士也師幼名藤吉。寄事浪華豪家行年三十。脫然出家入洛北興聖寺為關白和尚弟子。雲遊四方見諸名

賢泛西洞院風月君學和歌能究其
道嘗獨棲于鷹峰年餘自作山中四
威儀歌戊申災後再來浪華屏居于
天王寺側舊主招之宅於市中常以
和歌為事創註新勅撰集又為初學
著澁波津今茲年八十三自謂前途

匪遠乃作源語中人物題詠五十餘
首納諸石山寺因著大意及餘論各
一篇以副之徵辭予ニ於和歌固不
有所識焉而竊視師ニ為人簡易温
藉與物無競如其著述深觀于佛理
最得作者本旨矣予既高師ニ之行旦

嘉貫壽考有成也為敘小傳以代跋
法云
文政庚寅三月
關勝之撰并書

文政十三年庚寅五月刻成

弄花軒社中藏版